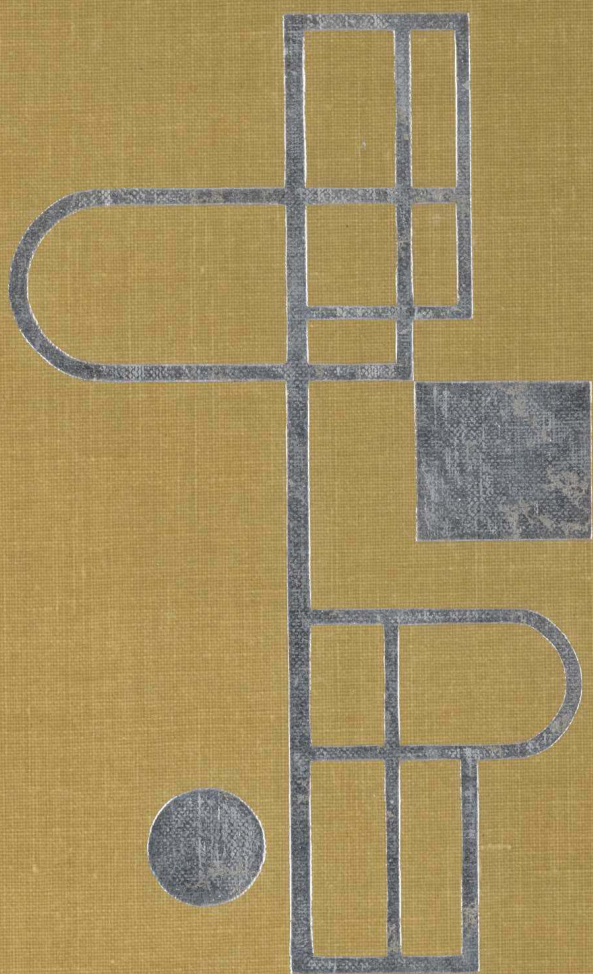


現代文藝評論集 (一)



現代日本文學全集 94



現代文藝評論集

〒550 大阪市西区江戸堀2-3-4
-0002 古金一郎方

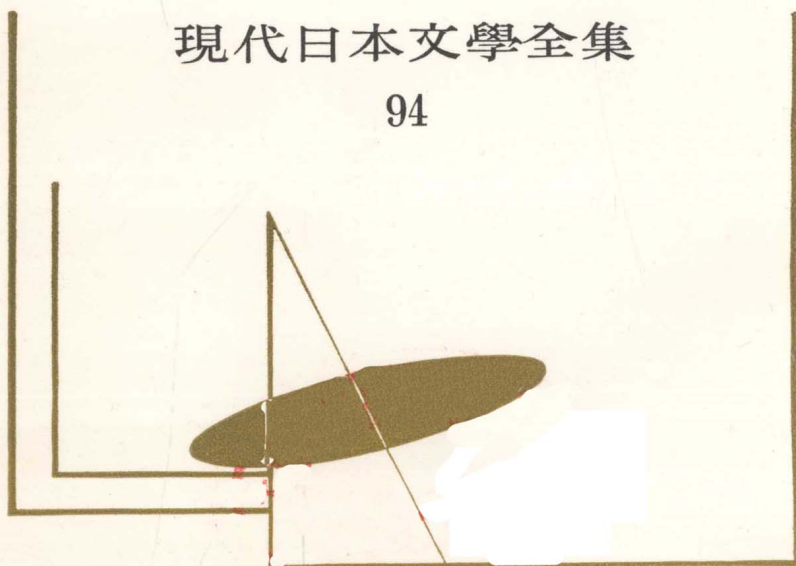
S.U.中国へ本を送る会本部

(大阪花甲協会贈書会)

電話06-441-4397

現代日本文學全集

94



筑摩書房版

現代文藝評論集（一）

昭和三十三年三月五日 印刷
昭和三十三年三月十日 発行

代表者
長谷川如是閑

東京都千代田區神田小川町二ノ八

発行者 古田 晁

東京都青梅市根ヶ布三八五

印刷者 山田一雄

東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行所 筑摩書房

振替 東京 一六五七六八

製印整
本刷版
有株株
限式式
會會
社社
美精精
行興興
製興興
本興興
所社社

現代文藝評論集(一) 目次

徳富蘇峰

近來流行の政治小説を評す……………セ

石橋忍月

想實論……………二

舞姫……………六

大西 祝

批評論……………三

俚諺論……………五

田岡嶺雲

下流の細民と文士……………三

一葉女史の『にぎり江』……………三

ヒューマニチー……………三

詩人と人道……………七

明治叛臣傳(總叙)……………元

登張竹風

馬骨人言を難ず……………四

馬骨先生に答ふ……………五

文藝道德の交渉……………五

綱島梁川

予が見神の實驗……………七

角田浩々歌客

比興詩を論ず……………六

長谷川天溪

文藝と道德……………六

現實暴露の悲哀……………七

金子筑水

個人主義の盛衰……………六

文藝と實人生……………八

白柳秀湖

パイオニアの惡戰……………八

肉情細叙の傾向……………八

幸徳秋水兄を送る……………六

新秋(序)……………六

後藤宙外

眞面目なれ……………六

片山孤村

自然主義脱却論……………六

抱月の偽自然主義……………六

魚住折蘆

自然主義は窮せしや……………一〇

自己主張の思想としての自然主義……………一〇

穩健なる自由思想家……………一四

大杉 榮

生の創造……………一六

新しき世界の爲めの新しき藝術……………一九

安倍能成

自己の問題として見たる

自然主義的思想……………二七

ケーベル先生とオイケン博士……………三三

田中王堂

夏目漱石氏の『文藝の哲學的基礎』

を評す(抄)……………三五

當來の文藝……………三九

本間久雄

民衆藝術の意義及び價值……………三三

近代劇に描かれたる離婚問題……………三五

相馬御風

還元錄(抄)……………四〇

個人主義思潮(緒論)……………四四

赤木桁平

「遊蕩文學」の撲滅……………四五

所謂「自然主義前派」に就て……………五〇

和辻哲郎

「自然」をよく見ない人……………五四

「もののあはれ」について……………五九

中澤臨川

世界平和を主題に……………二二五

現代文明を評し、當來の新文明

新感覺派の誕生……………二二六

をトす……………二二七

新居 格

厨川白村

共產主義黨派文藝を評す……………二二八

創作論……………二二九

コスモポリタニズム點描……………二三〇

加藤一夫

小宮山明敏

民衆は何處に在りや……………二三一

新感覺派論、無意志前派時代を越

大なる過程……………二三二

えて……………二三三

竹内 仁

現代作家の傾向に就いて……………二三四

阿部次郎氏の人格主義を難ず……………二三五

勝本清一郎

再び阿部次郎氏に……………二三六

藝術運動に於ける前衛性と大衆性……………二三七

土田杏村

藝術の國民的評價と世界的評價……………二三八

理想主義と愛……………二二九

大宅壯一

「雨瀟々」そのほか……………二三〇

文壇ギルドの解體期……………二三一

吉江喬松

文學史的空白時代……………二三二

農民と文藝……………二三三

宮本顯治

千葉龜雄

敗北の文學……………二三四

長谷川如是閑

萬葉集における自然主義……………二五

三木 清

賭……………三六

ネオヒューマニズムの問題と文學……………三一

谷川徹三

文學・形式問答……………三二

戸坂 潤

文學・モラル及風俗……………三〇

反動期に於ける文學と哲學……………三四

大森義太郎

いはゆる行動主義の迷妄……………三四

杉山平助

商品としての文學……………三七

批評の敗北……………三九

矢崎 弾

白鳥と秋聲の抗爭……………三五

自我の發展における日本の性格……………三七

保田與重郎

日本の橋……………三二

杉山英樹

目撃者の反省……………三八

獨斷について……………三三

除村吉太郎

よき文學のために……………三〇

解説……………四三

年譜……………四七

現代文藝評論集

(一)



徳富蘇峰

近來流行の政治小説を評す

今日の文學世界にて、驚く可きは、小説の流行なり。而して特に驚く可きは、面白からざる小説の流行是れなり。吾人は敢て小説の面白からざるが故に、其の著者先生達を罪せざるなり。何となれば今日は小説を作るに於て、最も六ヶ敷時節なるを知らばなり。看よ看よ。今日の社會を見よ。實に流動體の社會にあらずや。凡そ社會の事々物々、否な社會彼れ自身すらも、流るるが如く、漂ふが如く、來るが如く、去るが如き、其の變態百出、今日を以て、明日を卜する能はず。此の波濤洶湧の中心に立て、明治の小説を作らんと欲せば、一種無類の早取寫眞者とならざる可らず。即ち社會の面目を畫くに止らず、併せて社會變動の模様を畫かざる可らず。

古人曰く、「畫咸陽宮殿易。畫楚人一炬二難。畫三船艫千里一易。畫三日月潮勢二難。」と。而して我が著者先生達は潮を畫かざる可らず、火を畫かざる可らず、豈に又た難からずや。知る可し、明治の社會にありて、小説家となるは、決して氣樂の閑事業にあらざることを。

且つ彼の小説は、社會の鏡なり。小説の出來事は即ち鏡中の花なり、水面の月なり。小説の不調子不都合なるは、社會の不調子不都合なるが故なり。若し小説の面白からずとて、直に著者を罪せば、花の美艶ならざるが爲めに、鏡を怒り、月の清光なきが爲めに、水面を尤むるの類なり。是れ豈に公平の裁判ならんや。

雖、然、夜深くして明星光を放ち、世亂れて英雄顯はる。今や我が文學世界は、即ち擾亂の世界なり。何の秩序もなく、何の慣例もあらず。蒼々、莽々、正に是れ高材逸足の士、其の力を試みるの時なり。それ八代の文學衰頹して、而して後韓退之出で、古文辭派跋扈して、而して後ユーゴ出で、英國の人心腐敗の域に瀕して、而して後ミルトンの天國失墜出でたり。蓋し彼の文學者は、社會の明鏡たるのみならず、復た

其の燈臺たらざる可らず。知識世界の代表たるのみならず、復た其の預言者たらざる可らず。然り而して今日我邦の人民は、實に野に呼べる預言者の聲を聽かんと跋望するものなり。然らば則ち吾人豈に彼の著者先生に向て、望む所なきを得んや。

既に望む所あれば、勢ひ一言せざるを得ず。吾人は固より世の著者先生に向て、恩怨なし、何の暇ありてか、無用の惡口をなさんや。吾人は飽迄著作の難きを了す、別けて現今に於て最も難きを了す。吾人豈に辯を好まんや、吾人はただ著者先生に望む所のもの多し、故に其の言又た切なり。幸に深く罪する勿れ。

抑も小説と云へば、其の種類甚だ少からず、著者の目的とする所も、亦た同じからず。馬琴と春水と相去る幾何ぞや。施耐庵と董解元と相去る幾何ぞや。デッケンスとサカレーと相去る幾何ぞや。鴨の脚短しと雖も之を續がば憂へん。鶴の脛長しと雖も、之を斷たば悲まん。故に吾人は下宿屋の記事本末、牛肉店の年代記等を以て、目的とする小説は暫く之を他日の問題に譲り、先づ彼の高く自から標榜する政治小説なるものに就て觀察を下さん。

(第一) 體裁の不體裁 小説は自から小説の體裁あり。政治小説と雖も、小説と名乗るからには、小説らしき體裁を備へざる可らず。然るに吾人竊かに現今の所謂政治小説なるものを拜讀するに(二三屈指の大先生達の著作は兎も角も)、實に其不體裁なるに一驚を喫せずんばあ

らず。それ滑稽戯に於て、人を愁嘆せしむるものは、我れ其の不體裁なるを知る。悲劇に於て人を失笑せしむるものは、我れ其の不體裁なるを知る。然り政治小説に於て、ただ漫に政談演説に従事するもの、豈に其の面目ならんや。

それ發憤書を著はすもの、奚んぞ明治の小説家のみならんや。ユーゴの如き、ヂューマの如き、スコットの如き、リットンの如き、皆な小説を假りて其の胸臆を顯るものなり。豈にただ諸氏のみならんや、京傳、一九、風來、蜀山人と雖も、皆な然りとす。蓋し人は吹聴を好むものなり、或は言葉を以て語り、或は文字を以て語り、或は顔色を以て語り、或は眼を以て語り、或は手を以て、或は足を以て、或は坐作、舉動を以て、悉く其心中の祕密を語るものなり。然らば則ち何ぞ獨り之を我が著者先生に於て怪しまん。而して尙ほ怪む可きは其の之を語るの方法是れなり。

それ政治小説なるものは、小説に出で来る數多の事情と、種々の人物とをして、知らず覺えず、隱々冥々の裡に、著者が政治上の意見を吐かしむるのみ。約言すれば即ち著者が自から其の意見を吐かず、小説を経て、其の意見を吐くものなり。然るに現今の所謂政治小説なる者は、乍らにして一人の男兒出で來り、雄辯滔滔として數千言の演説をなせば、又乍らにして一人の婦人出で來り、又雄辯滔滔として數千言の演説をなす。彼等は行爲を以て演説せず、直に演説を以て演説せり。而して彼の性急短慮なる

著者先生は、是れすら面倒なりとなし、遂には矢も鐵砲もたまらず、自から幕を排いて、講壇に現れ出で、恰も人形師が人形を使ふ如く、彼の人物等が自然の場合に迫られて、餘儀なく口を發くを俟たず、勝手次第に指圖をなし、其の極は彼等の演説を以て、演説するにあらずして、却て自家の演説を以て演説するに到る。故にさもあらばあれ、其の議論は巧妙なるにせよ、其の小説は實に拙劣と云はざる可らず。

吾人嘗て名家の小説を繙く、未だ始より著者が如何なる寓意あるか、如何なる懷抱あるかを知らず。興に乗じて讀む、未だ曾て著者が説法するを聴かず、然れども愈々讀めば愈々感ずる所あるが如し、我れ自から何の故たるを覺えざるなり。恰も芳醇に酔うたるが如く、電氣に感じたるが如く、魔術に迷はされたるが如し。ただ精神恍惚として、何時の間にやら著者の魔術劑を喫したるかと思ふなり。小説の妙それ此の如きのみ。著者先生奚ぞ此れを學ばざる。

(第二) 脚色は有れどもなきが如し 脚色は作爲するものにあらず、自然に生長發達せしむ可きものなり。凡そ一の發端あれば、因果相趁ひ内部の事情と、外部の境遇と相摩擦し、一事萬事を起し、一波萬波を搖かし、水到りて渠成り、豆熟して莢發くが如く、自然に生じ、自然に開き、自然に結ぶ、是れ小説の化境なり。然るに我が著者先生達は、一向此の點に頓着せず、因縁もなく關係もなき、事柄を遠慮會釋なく並べ立て、恰も山中より切り出したる、荒削りの材

木を其處此處に投げ散らして、我れこそは結構壯麗なる家屋を建築したりと誇るが如き状態は何ぞや。

よし又た中には随分脚色の整頓したるが如き者あれども、其脚色たるや、發端と結局と甚だ相接近し、恰も判官切腹の場より、一躍して四十七士打入りの段に移るが如く、中間の出來事は、何の造作もなく、唯ださらさらとして奔り行けり。吾人は此れを讀んで、如何に彼の小説中の人物等は、空中を高飛するの魔術なるかと疑ふなり。人生は尙ほ階を踏んで樓に上るが如し、如何に奇術ありと雖も、既に人間たる以上は、決して一足飛に飛行する能はざるものなり。而して人間の眞味は此の階又階を踏み、級又級を攀ぢ、人情反覆せる世路崢嶸の中に嘗むるを得るなり。故に小説の尤も注意す可き所は、始終の兩端にあらずして、中間にあり。即ち中間の道行こそ小説の本題なれ。著者先生豈に此理を知らざらんや。而して其脚色なるものを見るに、即ち其の最も上出來なるものを見るに、多くは邯鄲の客屋に居睡りしたる廬生が、夢中の出來事の筋書に外ならず。詳かに言へば、「茲に一個の寒貧書生あり、不圖したことにて、或る溫泉場に於て、某の貴嬢と相見たり。互に相憐むの情を生じたり。然れども種々の困難あり。遂に種々の困難に打ち勝ちたり。芽出度結婚したり。寒貧書生は細君の持參金に因りて財産家となれり。夫婦相共に政治に奔走せり。端なく名望赫灼として民間黨の主領となれり」と

云ふに外ならず。是れ豈に廬生のみならんや、神田下宿屋の二階に籠城する書生輩と雖も、亦た此の快夢を見るならん。故に若し此を以て「寒貧書生夢物語」と云ふ、或は可なり。然れども此を目して堂々たる政治小説の名目を附するに到りては、吾人は唯だ著者の大膽なるに驚くのみ。

馬琴氏の八大傳の如きは、明治の新小説家より、様々の批難を受けたり。吾人と雖も随分感服せざる所なきにあらず。されど其の脚色の雄整精練、而して波瀾萬丈なるに到りては、自から大家の規模あり。ビイコンスフキルト伯の如きは、固より第一流の小説家にあらず、然れども其の「エンデミオン」にせよ、「コンニングスビー」にせよ、其の脚色の濃なる、開くが如く、閉ざるが如く、抑ふるが如く、揚ぐるが如く、活かすが如く、殺すが如く、其巧を弄するや、「將軍欲以巧伏人。盤馬彎弓惜不發」の趣きあるを見る。知らず我が著者先生は果して如何。

(第三) 意匠の變化少し 小説は無盡藏なり。山あり、川あり、花あり、月あり、英雄あり、懦子あり、盜賊あり、惡人あり、虎もあり、狼もあり、神もあり、幽靈もあり。凡そ此等の材料を都合よく點綴するは、乃ち意匠の然らしむる所なり。字に字法あり、句に句法あり、章に章法あり、部に部法あり。而して能く其の法を活用し、人をして倦む能はざらしむる者は、乃ち意匠の然らしむる所なり。吾人は水滸傳を讀

んで實に施耐庵の及び易からざるを知るなり。それだ一校の筆、或は景陽岡の虎となり、或は草料場の火となり、或は吳用の智となり、或は李逵の暴となり、或は潘娘の淫猥となり、或は武松の神威となる。其の意匠の巧妙なる、其經營の慘憺たる、熱時人を熱殺し、寒時人を寒殺し、忽ちにして笑、忽ちにして哭、忽ちにして譏、忽ちにして罵、忽ちにして悲風慘雨、忽ちにして山笑ひ水歌ふ。縦横倏忽、鬼沒、神出、實に人をして一驚一喜せしむ。吾人は敢て施耐庵を以て、我が著者先生に望まざるなり。然れども吾人は少しく著者先生達が美術的思想を適用せんことを願はざるを得ず。蓋し小説をして多味ならしめんとせば、意匠を用ゆるに如くはなし。意匠を用ひんと欲せば、變化せしむるに如くはなし。意匠の妙は變化にありて存す。

彼の所謂政治小説なるもの、固より變化なきにあらず。然れども其の變化は、四疊半の部屋を左に動き右に歩むが如きの變化なり。變化は變化なれども、到底四疊半中の變化なり。如何に忠實なる讀者と雖も、豈に卷に對して欠伸せざるを得んや。

(第四) 書いて穿たず 小説の妙は畫くにあり。畫くの妙は穿つにあり。穿つとは何ぞや。人々の言はんと欲して言ふ能はざる者を穿つなり。心に思うて口に出だす能はざるものを穿つなり。エメルソン曰く「人はただ人を畫き、人を作り、人を思ふ」と實に然り。而して彼の小説家なる

ものは、殊に其の甚敷ものなり。彼れ人の顔色を見る、恰も博物學士の精細冷淡なる眼孔を以てし、彼れ人情を察する、恰も解剖學士の周到寧靜なる觀察を以てす。其の穿ち得て、人を驚かし、人を喜ばす決して怪むに足らず。蓋し爲永春水氏が梅毒の如きは、ただ怙々たる猥褻談にして、批評家の眼孔よりすれば、固より文の價直あらざる可し。而して彼の婦女子、遊治生が、此れを讀んで夢の如く、幻の如く、食して其の味を忘るるに到る所以のものは、能く穿ちたるが故にあらずや。彼等胸中の寫眞彼處にあるが故にあらずや。政治小説の要は、政治の内幕を穿つにあり。政治の舞臺を畫くにあらずして、政治の樂屋を畫くにあり。小説家の眼孔を注ぐ所は議事堂にあらずして、應接間にあり。應接間の會話にあらずして、會話の湧き出る主客の胸中にあり。蓋し彼の小説家は、尙ほ上帝の如し。見ざる所なく、聞かざる所なく、知らざる所なく、在らざる所なく、彼の政治家等が夢に見たることさへも、其の記錄に筆記し居れり。横着なるは政治家なり、彼れ好んで人を瞞せんとなす。然れども上帝と小説家に到りては、彼れ之を如何ともする能はざるなり。如何せん世の所謂著者先生達は、自家の胸中を以て、漫に政治家の胸中をトし、自家の色眼鏡を以て、漫に政治の真相を見る。爲めに人をして肉を畫きて、骨を畫かざるの憾を發せしむるなきにあらず。若し彼の紙上の政治家をして、口あらしめば、著者先生が太だ與し易きを悦ばん乎。抑

も亦た知己にあらざるを嘆ぜん乎。それ西瓜の皮相は緑色なり、割いて兩斷せずんば、紅朱斑爛たる真相を見る能はず。西瓜にして尙ほ此の如し、況んや政治に於てをや。

(第五) 俗物の共進會 吾人は敢て小説を以て福音書となさず、されば如何なる惡人あればとて、如何なる不道德をなす者出づればとて、一向に頓着せざるなり。然れども俗物のみを以て全體の小説を組織するに到りては、少しく不平なき能はず。如何に吾人をして、賞讃の辭を呈せんとするも、實に現今の政治小説世界の人物は、俗物共進會に適當なる出品なりと評するの外はあらざるなり。其の客位實位にある種々の人物は、暫らく他に措き、先づ彼の著者先生が、滿腹の丹誠を竭して、送り出せる小説の主人公即ち英雄を見よ。吾人は實に其の俗物たるを認む。即ち一寸伶俐でもあり、意氣でもあり、學問も出来るし、世才もあるし、婦人よりも戀ひられ、他人の交際も甘く、商人ともなれば、官員ともなり、書生ともなり、學者ともなる、萬事萬端拔目なく、直に浮世を渡る利口者に外ならず。彼等は所謂の純然たる政治世界の、「丹次郎」なり。而して彼の著者先生達が、互に申合せたる如く、負けず劣らず、各此の「丹次郎」を造り出すに汲々たるは何事ぞや。吾人は實に此に對して我が著者先生が作爲する人物の標準の、甚だ卑下なるを嘆ずるなり。吾人は現今の小説にある、鄙劣の小人の、今一層鄙劣なるを厭はず。吾人は奸黠の惡人の、今一層奸黠

なるを厭はず。然れども英雄の、今一層英雄ならんことを願はざるを得ず。彼のミルトンのサタンを見ずや、何ぞそれ堂々たるや。彼れ上帝の雷と戦ひ、彼れ天使の劍と戦ひ、彼れ火焰の湖水と戦ふ。彼れ希望を有せず、然れども彼れ却て絶望を以て希望とせり。吾人は著者先生に向て、敢てサタンの如き英雄を造り出せと云はず。然れども願ふ。英雄らしき英雄を造り出さんことを。即ち精神あり、氣力あり、畏る可く、愛す可き英雄を造り出さんことを願ふ。

雖 然 吾人は一概に、敢て以上の如き批難を試みざるなり。勿論吾人が平生尊敬する諸大家の著作中には、随分感服す可き好小説なきにあらず、且つ如何に尋常平凡なる著者先生の作と雖も、其の缺點相應には、長所もある可し。吾人は、敢て頭ごなしに抹殺せざるなり。然れども方今小説の熱病は著者先生をして好評判に飽かしめたらん。故に吾人は賞讃の義務をば、暫らく他人に譲り、敢て著者先生の參考に供せんと欲し、一二指摘する所あり。一片の氷心此の如し。著者先生よ、幸に吾人に向て名譽毀損の訴訟を起す勿れ。吾人は諸君に望む所多ければこそ、斯くは直言したるなり。

聞く現今佛國後進の文學者ゾラ氏好で佛國演劇作者の泰斗たる、デュマ、ヒュエー、ソンド諸氏を排撃して餘力を剩さず。一日滑稽劇場の興行主ベーランに會す。彼れ笑て氏の肩を叩いて曰く、余は平生君の批評を愛讀し、且つ頗る其の當れるを覺ゆ。然れども君若し秀逸なる院本

を作爲して余に與へずんば、余は依然諸氏の院本を興行せざるを得ざるを如何と。それ能く言ふもの未だ必ずしも能く行はず、吾人は固よりゾラ氏にあらず、然れども此の如く、直言したるが爲めに、世の著者先生が、吾人に向て汝の言ふ所は甚だ當れり。汝奚ぞ試に一の政治小説を作りて、其の言を行はざるやと謂はば、吾人はただ頭を低れて不敏を謝せんのみ。

(明治二十年七月「國民の友」)



石橋 忍月

想實論

(一) 詩、詩人

吾人は本論に入るに先ツて、吾人が是より屢々用語せんとする「詩」其者に就て一應説明するの必要を感じず。何んとなれば多數の讀者中には、或は吾人の所謂「詩」を以ツて漢詩と思惟するものもあらん、或は韻脚ある文字のみを指すと誤認するものもあらん、或は結語整調の文字を指すと思ふものもあらん。然れども吾人が所謂詩なる者は此の如き狹意の者にあらずして猶ほ廣大の意義を有す。漢詩和歌短歌長歌發句俳諧俚謠等結語整調の文字は勿論、戯曲小説奇話をも「詩」中に含蓄せしめ、復た其韻文と散文とを問はざるなり。尤も詩の多數は有韻るか若くは無韻なるも整調ある者に歸すと雖も、

吾人が詩を論ずるは外部の形式よりせずして、内部の本質よりするが故に、苟も美術的の文字は悉く「詩」と言ふなり。是に於て乎吾人は詩の定義を下すことを得るなり、曰く、詩とは言葉の働きに由つて、人間の性情生活と意思生活とが、美術的に發揮せられたるものなり、

夫れ詩は始終「美」の約束を離るる能はず。故に讀む者をして吟ずる者をして見る者をして聞く者をして常に「美」の感念を惹起せしむ。故に之を叩けば微妙の響きあり、之を嚼めば雋永の味あり、之を誦すれば活動の機あり。然冥然情之が爲めに哀感を生じ咏嘆を發す。詩の「美」に於けるは恰も魚の水に於けるが如く花卉の日光に於ける如く須臾も離る可からず。若し之を離る時は彼は潸刺の勢を失うて枯死にして美中に存在せざらんば、夫の無味乾燥なる理科博物の書と何ぞ擇ばん。是れ詩が美術的に發揮せられざる可からざる所以なり。何をか性情の生活と謂ふ、何をか意思の生活と謂ふ。曰く性情は感情なり、意思は考察なり。

感情は外より來り又内より發する所の興奮なり刺戟なり、考察は感情より知に達し知より理に達したる者なり。故に人の感情は考察を俟つて昇進し考察は感情を俟つて振動す。一ツは外に造化の美在に逢ひ、一ツは内に造化の美理を悟る。二ツの者相俟つて活動す。故に性情と意思とは人間と同行して分解すべからず。此二者より發する種類を精選し昇進せしめて言葉に現はす。是に於て乎初めて詩成る。是れ吾人が、詩は人間の性情生活と意思生活とが、發揮せられたる者と言ふ所以なり。

吾人の所謂詩と稱する者は、實に此の如く美術的に發揮せられたる文字なり。而して之が發揮を主とする者は何ぞや。曰く詩人はなり。彼自ら稱して風流韻士と言ふもの、花を看て一句を吐き、蛙を聞て一語を並ぶるが如きは、未だ吾人の所謂詩人なる者には非ざる也。

(二) 感念、精神

詩の成るや先づ感念起る。感念起れば恍惚の間人事會し人理來り、豁然として宇宙の玄、天地の微を感得默會する所あり。暗夜に明月を見雪中に麗禽を聞くも亦た得べし。健全の思、健全の詞感に隨つて現はれ念に隨つて變ず。而して此感念を支配するものは即ち所謂精神なり。精神は性情と意思の散布の弊を拒ぎて唯一の象形に收合する者也。吾人は之を呼んで詩人の防腐劑と稱せんと欲す。

吾人は性情意思に就て復た言ふを欲せず。然

れども猶ほ一言以つて附加せざる可からず。性情（感情）は時として事物の真相を誤ることあり。何となれば迷信速認喜怒哀憎等は物を己に迎へずして己れを物に移せばなり。故に性情のみより出でたる文字は一時にして永久なる能はず。之を永久ならしめんと欲せば意志の判定鑑識を要す。淇園會つて言へるあり。曰く「其物の情狀を靜察訂觀するは蓋し平生外に應ずるの作用と同じからざるなり、外に應ずるの作用は旋轉し旋易なり、動止常なくして而して時として存せざるはなし、冥想（感念と同意に歸す）中の精神の如きは乃ち然らず、其の感現の時に方つて、其人必ず須らく志を繼ぎ意を縛て、念々相續以つて之を執持し以つて之を觀玩し、而して後始めて長存するを得べし。此れ其異なる也、作家の詩字々此境を離れず、句々此界を遠へず、念々相續執持して以つて之を鼓盪し歌詩を爲す」と。蓋し知言なり。淇園が「動止常なし」と言へるは吾人の所謂性情を意味し、「執持長存」と言へるは吾人の所謂意思を意味す。而して感念を重んじ精神を重んずるは吾人と同一なり。是に於て乎、吾人は言ふ、性情を知つて意思に達せざるは下の詩人なり、意思を知つて感念に達せざるは中の詩人なり、感念を知り又精神を知るものは是れ最上の大詩人なり。吾人は茲に最も引用に輕便容易なる漢詩三首を擧げて其一例となさむ。

細雨濕衣看不見、閑落落、地聽無聲、（盧綸）

霑衣欲濕杏花雨、吹面不寒楊柳風、（志南）

梧桐月向一窗中、照、楊柳風來三面上、吹、（康節）

此三人の作、句調景趣共に相似れども功拙の差目から三段に分る。盧綸の作は佳句なれども吟詠するに餘情なし、志南の作は清麗閑暇咀嚼して味あり、而して康節に至つては志南に優りて又一等從容の氣象あり（右鳩巢詩文評品參照）。是れ必竟盧綸は辭に拘りて意思に達せず、志南は情を主とするも感念に達せず、康節は感念を知り又精神を知るが故なり。

吾人の言思はず支路に入れり。想、實を論ぜんと欲して詩の大體を説き、詩の大體を説かんと欲して知らず知らず其細節を論ぜり。然れども緒言大に本論と密着の關係を有す。讀者請ふ之を記憶せよ。

（三） 想、實の性質

詩の發生する淵源、大約別つて二ツとなす。曰く想、曰く實。想は虚象なり、實は眞景なり。眞景は捉ふべし、虚象は捉ふ可からず。性情の終極は實となり、意思の終極は想となるなり。詩料必竟到る處に在り、故に江湖到る處はれ詩人の家なり。然れども詩の重なる目的物は實に人間の生活に在り。故に人間が既に經驗したるか若くは經驗しつゝある生活は實となり、未だ經驗せざる生活は想となる。歴史傳記は實の最も實なるものなり。神意神託呪詛妖怪等、總

て人智の得て謀るべからざる脚色のエビツクの如きは想の最も想なるものなり。人或は曰く實は飽くまで實に入るを要す、想は飽くまで想に馳するを要す、何となれば實は眞なり枉て偽となすべからず、想は虚なり枉げて制すべからざればなりと。夫れ然り豈に夫れ然らんや。吾人思ふに詩實は成るべく實ならざるを要す、詩想は成るべく想ならざるを要す。此言頗る奇なるが如きも奇に非ず。請ふ吾人の説く所を聞け。實は常に眞理の邪路に迷ひ、想は常に眞理の範圍外に足る。故に實のみを僻守するも非なり、想のみを僻守するも亦た非なり。況んや詩實にして實に入れば既に美術的の文字に非ざるに於てをや、又況んや詩想にして想に馳すれば人間の性情生活と意思生活とは望む可からざるに於てをや。されば詩の要は内に虚象を設けて文字之を實にし、外に眞景を探りて又之を虚象に歸するに在り。故に詩は想より出でて實に入り、又實より出でて想に入るべし。俗に想實は理想派實寫派の分るる所とするは誤れり。理想派實寫派の分るるは只想實出入の先後に由るのみ。實ならざる實、想ならざる想、二者出入調して詩茲に生る。例へば「妾郎を待ち焦れたり」と言ふ是れ實なり、實を有りの儘に寫したるが故に意暴露して句外何の餘情もなく風味もなし、未だ美術的の文字にあらず。若し之を「蚊帳の廣さに寝つきつ、蚊をやく火より胸の火のゆるる思ひ」（俚諺）云々と、想より實に移して二者を調するときは、情味風韻前者に優りて

聞ゆ。又「燈火風にあたりてチラチラ」を改めて「風に瞬く燈火」となすときは、文字に活動の機ありて咀嚼の味あり。是れ實より想に移したるが故なり。

吾人は猶ほ一例を惹いて以て想實調和の效能を確めん。

悲しい涙は目より出で、無念の涙は耳からなりとも出るならば、云はずと心見すべきに、同じ目より流るる涙（時雨炬燵）

搖籃から墓場までの荊棘の路、杖を持つても持たないでも、誰れしも一度は歩き盡すもの、（ミルザ、シャツフヒ詩集、拙著露子姫の序文に譯載）

前者は「吾は悲しき爲に泣くにあらずして口惜しき爲めに泣く」と云へる實を移して想に入れたるものなり、後者は「世途如何に艱難なりと雖も一度生れたる者は必ず死まで到着す」と云へる想を移して實に入れたるものなり。故に其云ふ所は深き意あるにあらずれども、而かも多量の情味、言外に湧れて人心を動かすに非ずや。嗚呼誰か復た想のみを以て詩を作らんとする者ぞ、實のみを以て詩を作らんとする者ぞ。

（四） 人境、詩境

人間茫々の間、詩人の資料は千種萬種にして、到る處拾ふが如くに散布しありと雖も、中に就て詩に入るべきものと入らざるものとあり、是れ詩境、人境の分るる所以なり。若し詩境人境

の別を知らず、漫然文字を羅列し是れ詩なりと言ふものあらば、愚にあらずれば即ち淺見なり。吾人は強ち實寫派に不同意なるものにあらず、又美中には必ずしも善の存在を要せざることを認む。然れども夫の爲永春水の如きは、些末の長所を有せざるにあらずるも、到底此淺見者の仲間たるを免るる能はず。又篁村翁の舊作、

腹の子、廻り車、兄の手柏（共に載せてむら竹に在り）の如きも詩境と人境とを同一視したるものにして、詩に入らざるものを無理に詩に押込たるものなり。故に之を極言すれば是等の書は小説にあらず。其他第三四流以下の小説家に至つては此弊に陥るもの枚舉するに遑あらず。今茲に極端なる例を舉げんに、農婦野邊に足を投げ出して焼芋を喰ふの體、是れ實に人境なり。之に反して農婦菜畦に立ち顧みて跡を慕ひ來れる家鳩に麴包を與ふるの體、是れ實に詩境なり。

吾人未だ支那西洋に於て詩人が詩境の實例を挙げたるを聞かず（強ひて求むれば之れ無きに非ざるも頗る拙なり）、獨り吾國に於て一人あり、曰く閨秀の詩人清少納言是なり。清少納言が枕紳紙中の「心ときめきするもの」「すきこしかた戀しきもの」「こころゆくもの」「憎きもの」「すさまじきもの」等に枚舉せし十百の例は悉く詩境に入るべきものを精選したるものに非ずや、アア清少納言は實に一代の人傑なる哉。

吾人想ふに詩人の詩を作らんと欲するに當つて、先づ着目注意すべきもの二ツあり。第一、人境と詩境とを精査すること、第二、詩境を美

術的の象形に收合することはなり。而して之をなすには、一つは實に鑑み二は想に鑑むべし。詩人ブラテン侯會つて言へるあり、曰く、

愉快なるは夫れ詩人なる哉、詩人は常に時日が生み出す現在を、永久に保存するのみならず、亦た場所に於ける物體を不朽ならしむと。是れ詩人が實に鑑みるの必要を別言したるものにして、永久と言ひ、保存と言ひ、不朽と言ふは、必竟詩境精選の結果たるに外ならず、又彼の魯國チフリスの哲學者ミルザ、シャツフヒも言へるあり、曰く

詩才——天授の能たる詩才！ 卿は馥郁の花を以てて人生の奥底を敷きつめ、眞綿を喜中に採り、藥劑を苦中に選び、光と眞理の古井より「明」解、其者の反照を招き寄せんが爲めに、黄金の導線を夫より心に架するものなり

と。是れ詩人が想に鑑みるの必要を別言したるものにして、花と言ひ、眞綿と言ひ、藥劑と言ひ、光と言ひ、眞理と言ひ、黄金の導線と言ふは、是れ即ち詩境を美術的に收合するの意に外ならず。要するに詩は之を實に鑑みずんば終に詩境を得ず、之を想に鑑みずんば詩境亦た「美」に入る能はず。而して想亦た實を俟たずんば遂に妄想空想となり、實亦た想を俟たずんば遂に再び人境に返る。

（五） 永遠不朽

人間生活の現象を推模觀玩して、現象以外に

無形の眞理を發揮し、若くは現象よりも一等進歩したる世界を反映するは、詩人の妙技なり。無形を有形の現象に求めず、高遠を卑近の人情に徴せざるは詩に拙なるものなり。有形を無形の眞理に照さず、卑近を高遠の意匠に移さざるは、拙の最も拙なるものなり。大詩人は普通現時よりも一等進歩したる眼孔を有す、而して小詩人は之に反す。大詩人は先生の噴を畏れずして却つて後世の笑を怕る、而して小詩人は之に反す。大詩人は事を考へ物を察して能く幽玄を反映す、而して小詩人は之に反す。要するに小詩人は凡俗一時の歡を買はんと欲して飄忽變轉好んで其色を眩爛にし、復た其理の淺薄なるを知らず。大詩人は何れの地帯何れの時代にも讀まれんことを欲し、永遠に適應貫通する入神的文章を出さんことを勉む。故に大詩人の作は讀む者をして三復思ひを致して已まざらしめ、小詩人の作は驟かに見て喜ぶべきものを久うして壓心を生ず。一ツは哲學者の參考となり、一ツは俗人の玩弄に終る。ローベルブライエル曾つてセヲフラストスの著書「人物の繪畫」を評して曰く、「セ氏が其風俗を摸したる所のものは同氏の時人にして亞善人なり。故に此書は實に二千二百有餘年前なる人物の肖像を畫けるものなり。然れども吾人が此繪畫を眼前に展覽するときは、其中に於て吾人が肖像を見、以つて一驚を喫するに非ずや。吾人は現に其中に於て吾人の時輩なる朋友仇敵の容姿を見るに非ずや。數千年以上の人と吾人との此驚くべき此全然た

る類似は抑も亦何の爲めぞや。蓋しセ氏は惟り亞善人を寫したるに非ず、皮を貫き核に至り人類の徴を發して、亞善人の假面を蒙らしめ、而して復た國風年齢男女職業を問はざればなり。各國の風俗と季候とは人間の外部に影響するも、其心情は何れの時代何れの地帯に於ても、之が爲めに決して動さるものに非ず。彼を隔つるものは只時と處とのみ、精神は相隔たるものに非ず。彼此の間言語の別あつて思想の別なく、風俗の異あつて行爲の異なるものなり」と（右自笑子重譯人様々參照）。アア「人物の繪畫」が黄金小冊の榮稱を受くる所以實に茲に存するならん。詩人常に此評言を服膺し此意を體して忘るるなくんば、其詩は永久に互りに珍重せられ、決して一時に消滅することなかるべし。故に、吾人は毎に謂ふ、詩は永遠不朽を貴ぶ、永遠不朽ならしめんと欲せば、或は無形を有形の現象に求めて高遠を卑近の人情に徴すべし、或は有形を無形の眞理に照らして卑近を高遠の意匠に移すべしと。吾人は此動作を總稱して「想に鑑み、又實に鑑みる」と謂ふ。セヲフラストスの永遠不朽なるも、想、實運用の妙なるに外ならず。故に吾人は又曰く、詩人が想に鑑み實に鑑みるは、永遠不朽の境に達する所以なりと。

(六) 大

常に離れざる者なり。吾人想ふに詩の大と稱するものに二ツあり、曰く外部の大、曰く内部の大即ち是れなり。外部に於ける大は只詩の皮相を大にするに止ると雖も、内部に於ける大は専ら其精神を大にするものなり。皮相如何に大なりと雖も其精神にして大ならずんば、ウドの大木と一般、其用は方一寸の栴檀にも劣るべし。之に反して其精神大なりとせば、縱令其皮相は小なりと雖も吾人は眞に詩大を知るものとして之を推稱せんと欲す。山嶽崩れ龍虎相闘ふの出來事を寫す、大は即ち大なりと雖も、是れ管に詩の外面を大にするのみにして毫も詩心其者を大にするに由なし。詩心にして大ならずんば素より文學上價值を有する大文學とは稱すべからず。兒女凡庸或はロビンソン漂流記を讀み、或は神稻水滸傳を讀み、快と呼び絶と呼び之を賞賛するありと雖も、彼等は詩を以つて玩弄物と同一視するものなれば深く咎むるに足らざるなり。縱令其寫す所の人事人物は些少なりと雖も、閑居郊行の偶感なりと雖も、匹夫匹婦の情愛に過ぎずと雖も、其精神——詩心にして大なれば、是れ實に詩の意を得たるものなり、詩の上乗なるものなり。

柴東海の佳人之奇遇の如き、末廣鐵腸の雪中梅の如き、矢野龍溪の報知異聞の如き、皆な詩大の何たるを知らざるものなり。是等の諸家は只皮相の大に戀々として復た精神の如何を顧みず。故に其文字は一時消滅的文字にして永遠不朽なる能はざるなり。夫のゲエターの短吟の